



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	スコットランドの教育改革と小学校の現状 ~ エジンバラ市立ドライ小学校を訪ねて ~
Author(s)	島袋, 純
Citation	琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要(16): 103-116
Issue Date	2009-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9673">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9673</a>
Rights	

## スコットランドの教育改革と小学校の現状

～エジンバラ市立ドライ小学校を訪ねて～

島袋 純\*

### Scottish Devolution and Educational Reforms : A Case Study on Dalry Primary School, Edinburgh

Jun SHIMABUKURO

はじめに

スコットランドの論文を書く場合にその都度必ず説明しなければならないことがある。「スコットランド」とは、についてである。まず、一般に「イギリス」とは、正確には、グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国といい、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの文化的独自性を有する邦から成り立つ連合王国であること、それぞれが独自の政治行政制度を備えていることである。スコットランドにおいては、1999年、防衛・外交と通貨・関税等マクロ経済以外の内政の立法権を移し替えてスコットランド議会が創設されている。

「教育」についても、1999年に移譲された権限に属するものであり、ロンドンの国会及び中央政府教育省は、教育については、立法権も行政権もいっさいもたない。したがって、国庫補助負担金も指揮命令権も監督権もなにもない。

スコットランドの教育は、1870年代までは、スコットランド国教会（カルビン派に属し英国国教会Anglican Churchとはまったく別）のもとにあったが、連合王国レベルで義務教育が

はじまり、ロンドンに権限が吸い上げられた。

しかし、1890年代に中央政府にスコットランド省の前身（北海道開発庁や沖縄開発庁に類似した地域担中央省庁）が設置されるとそこにスコットランドの教育に関する管轄権が移された。当然ながら中央の議会の立法に基づき仕事を行う中央官庁であり、閣議で統一される与党の政治的意思のもとに全国的な教育政策に則った教育政策が実施されてきた。1990年代初頭には、スコットランド省時代に国の定めた指導要領ができ、それに準拠して学校の授業内容は構築されるようになっていた。

しかし1999年の分権改革により、スコットランド省は、人員、組織、権限のほとんどすべてをもってスコットランド議会の配下のスコットランド政府に組み替えられた。現在、中央の国会、政府、教育省とは無関係にスコットランド独自で教育体系をつくりあげていく制度となっている<sup>(1)</sup>。したがって、現在では、学校教育関係の法律、規則等は、すべてスコットランド議会とスコットランド政府で決めるもので、ロンドンの国会及び教育省は直接的には関係がない。

\*琉球大学教育学部教授

分権改革後、スコットランド議会、政府、付属機関等によって、指導要領の大幅な見直しが始まって、2008年8月の新学期から、スコットランド独自の新指導要領それにそった授業を展開するように各学校は取り組むこととなった。

筆者は、教育行政及び学校教育の方法や内容の比較を専門とする研究者ではない。専門は欧州の自治制度、特にリージョナルレベルの統治機構、日本的に言えば「道州制」の比較研究である。もっとも進んだ分権改革を行ったスコットランドを訪れたのはその調査のためであったが、縁あってスコットランドのエジンバラ市内の小学校授業を訪問する機会に恵まれた。その視座から気がついた点を報告しておきたい。

## 1. スコットランドの教育制度と小学校の概要

スコットランドの教育制度及び小学校については、以下のような枠組みとなる<sup>(2)</sup>。

- ①教育制度の決定及び管理機構：教育関係の最高かつ最終的な法的権限は、スコットランド議会にある。同議会は、委員会中心主義を採用しており、実質的な審議はそこで行われる。スコットランド政府は、議院内閣制を採用しているために、スコットランド教育省（文部科学省に相当）と与党が教育関係法の原案及び予算案を作成し、政府提案として議会に提出する。教育行政は、スコットランド教育省の管轄であるが、大半の実質的業務は自治体（議会教育委員会・教育部）が担当する。独立行政機関としての教育委員会制度は採用されていない。
- ②学校制度：義務教育は、11年である。日本と比べると2年間長く、5歳から16歳までということになる。小学校（プライマリー・スクール Primary School）は、5歳児（日本の幼稚園相当）クラスを1年生として、7年（11歳児、日本の小学校6年生相当）までであり、中等学校（セカンダリー・スクール Secondary School）の義務教育期間は4年間である。大学進学希望者は、さらに5年目に進級しスコットランドの統一学力検定試験を経て、進路（大学への進学等）を確定する。
- ③学校経営：学校の人事及び予算について極めて大きい裁量をもつ校長のもとに、教務担当副校長と、事務担当副校長の二人が支える制度。ほかに、数名の非教員の事務系職員がいる。
- ④学校評価制度：完全な外部評価制度。独立行政機関として、教育検査機構というものがあり、そこが何年かに一度、各学校の外部評価をする。評価項目の設定や評価の基準や方法は、その機構が設定したもので、一つの学校につき一週間、7名の検査官が張り付き、評価項目にしたがって、先生、児童生徒、保護者等、必要あればだれにでも直接話を聞き取り、くまなく学校を視察し検査官の判断で、評価をしていく。評価報告書は、その教育検査機構の責任で、各学校の評価ごとに作成され発行される。
- ⑤学校選択制：小学校は選択制、中等学校においては指定制度。小学校については、完全な自由選択制が導入されており、親はどの公立学校でも自由に選択できる。校長の裁量が大いなので、校風はかなり学校ごとになる。保護者のかかわり方、学校の基金の造成の仕方学校ごとにかなり違う。中等学校は、原則、中等学校の校区内にある小学校の卒業生は全員その校区の中等学校に行くことになる。
- ⑥学校の規模：小学校の規模は、日本の学校と比較するとかなり小さい。大半の学校がひと学年で二クラス以下となる。最大規模の学校でも300名程度。学校は、とくに古い学校は刑務所というよりも、どちらかというところの教会に似ているつくり。敷地の真ん中に校舎が一個あって、それにすべての施設が入っている形である。町中の学校の場合は、地面もしくは芝生の運動場はない場合が多く、運動場というより学校の裏庭（まちではアスファルト敷きが多い）で体育も行う。学校敷地は、小さい学校でおおよそ200メートル四方である。中学校の規模は遙かに大きく、3個程度の小学校で一つの中学校区域となる。学校の

面積や教室数、生徒数もおおよそ小学校の3倍以上はあると考えると分かりやすい。

⑦学級の規模：小学校のクラス児童数（小学校3年～7年）は、法律で27名以下学級が義務づけられており、スコットランドにおける同学年平均学級児童数は、23人となっている。逆に、小学校では20人以下の小さいクラスも少なく、複数の学年をひとクラスにまとめる複式学級を日本の常識では考えられないほど多く作る。都心部の学校でさえ、複式学級をいくつかもつ学校が多い。

⑧教員&学習支援者等：小学校は、原則クラス担任制であり、クラス担任教員がそれぞれの教室に張り付いている。また、ひとクラスにおおよそ1名、学習支援者（Learning Assistant：LA）が張り付いている。これは有給職員で1年間の教育課程を受けた資格あるものしかたない。さらに、美術や体育など、教科専門の教員が複数の学校を掛け持ちで巡回しており、週何回か各学校で授業を担当する。英語を母語としない児童専門の教育を行う教員（English as a Additional Language: EAL Teacher）も同じく巡回教員である。教育ボランティア制度もあり、おおよそ保護者が参加するが、小学校低学年を中心に教室内で教育支援活動を行っている。

⑨授業の形態：一斉型の授業はほとんどない。授業の最後から終わりまで、一人の先生に40人の生徒全員が机を向けて、先生から生徒への一方的な知識伝達型のコミュニケーションの方式、児童間の水平的なコミュニケーションがほとんどない日本的な教室の作りではない。原則が、グループ学習である。20名あまりの児童を3もしくは4程度のグループにわけ、そこに先生、学習支援者、教育ボランティアが張り付く方式である。

以上が、スコットランドの教育及び小学校の基本的な枠組みと一般的な様子である。校長の経営権限、裁量はかなり大きいので、学校ごとに具体的な取り組みは大きく違ってくるのとことであった。実際に主たる調査対象小学校の近

隣のもう一つの小学校を訪問したが、教育方針、学校の様子、雰囲気等がかなり違っていた。

今回は、主として調査訪問に対して、理解と協力が得られたエジンバラ市立ドライ小学校の事例を報告したい。この学校は、スコットランドの首都エジンバラ市の都心近く、エジンバラ城の南西に約2キロに所在し、百年を超える歴史を誇り、近年では多くの移民を受け入れている地域にあり、都市地区の学校としては児童数が平均よりも少し少なめの学校である。

## 2、小学校の授業観察報告

小学校は、8月20日に学年が開始し、6月末に終了となる。今回、エジンバラ市に滞在したのは、5月後半から9月末であり、学年末の行事が目白押しの多忙な時期であったため、6月の学年終了直前に1年生、8月の学年開始直後に3年生及び5／6年生の複式学級の3クラスを観察させていただいた。また、担任の先生及び校長にインタビューすることができたので、観察及びインタビューを元に報告を構成している。

### 1) 小学校1年生の授業（英語）

以下で授業観察を行ったクラスの概要を報告したい。2008年6月18日午前9時から英語のクラスを観察した<sup>(3)</sup>。概要は以下の通りである。

①学級の規模：小学校1年生（Primary1: 5歳児クラス）児童数は16人で、学級担任の先生が1名、学習支援者が1名、EAL（第二言語としての英語教育）教師が1名、学習支援ボランティア（保護者）が1名の4人で授業を構成していた。

②教室の造り：教室自体は、日本の小学校の教室よりひとまわり大きめ、真四角に近い教室である。その教室に、児童一人ひとりに割り当てられた机と椅子というのは存在しない。教室を9つの空間、縦横3×3で区切っている状況であった。日本の先生の黒板に相当する部分、パソコンのスクリーン兼ホワイトボードとその前、周辺の何も置かれていない空間

がある。子どもはカーペットの上に直接座って先生の話聞く(写真1)。10人掛けの楕円のテーブルが、教室のまん真ん中と入り口右中央においてあって、「読み」グループの机と「書き」グループの机として使われていた。他に床にカード(学習カード)をおいてをカードゲーム的に学習する場所と5人がけほどの小さな机&椅子の場所があって、そこでも子供が学習していた。

③観察時の授業内容：5歳児クラスは、日本の学校では幼稚園の最終年に相当するが、幼稚園の雰囲気というより、やはり小学校という雰囲気。内容は、英語の「読み書き」で、1時間15分ぐらいの授業で、かなりみっちり授業をしていた。「読み」は、英語の単語レベルではなくて、センテンスを読んで、一つの物語(絵本)をスペルをちゃんと読み取って一冊全部声を出して読むというレベルを目指していた。「書く」方も、単語を書く、というレベルではなく、文章を書く、主語述語目的語、すべてそろえて書く、ということを指導していて、明日遠足に行くらしく、遠足で何をするか、ということ子ども、一人ひとりに絵日記のように書かせていた。最後は一番良かった子ども3人に発表の機会を与えていた。

④授業方法と進行：まず、最初にホワイトボード兼スクリーンの前の場所に全員を集合させて(写真1)、今日やることを子どもに伝え、三つのグループにわけた。「書き」グループ5人は、EAL教師のいる10人掛け机に、「読

み」グループ6人ぐらいが、学習支援者のいる10人掛け机に、残りがカードゲームのある教育ボランティアのいるところに分散させて配置された。それぞれのグループが同時に違うことをやるという様子であった。20分ずつぐらいで場所を交代して、ローテーションして1時間程度では全員が順番こそ違え、同じ学習を終えるという形だった(写真2)。

EAL教師と学習支援者は一度に相手にするのは担当グループの5人程度なので、かなり綿密な双方向のコミュニケーション、あるいは指導が可能で、子供の能力をとともよく把握できる状況であった。

5歳児なので当然かと思われるが、やはり、少し「読み」「書き」、があまりできない子どもがいた。驚いたのは、クラス教師は、それぞれのグループ、特に読みと書きのグループで、うまくできない子をグループから引き取って、個人指導的に教えていたことである(写真3)。



写真2 小1授業風景2(課題別グループ学習)



写真1 小1授業風景1(授業開始時)



写真3 小1授業風景3(個人指導の徹底)

これでは、絶対に落ちこぼれが出ない、ついて来れない、という子供が出ない教え方になっていた。

クラス教師は、それぞれの子供の学習到達レベルを把握していて、クラス全員が一定水準に到達することに気を配っている様子であった。よくできる子は、早めに済ませカードゲームを楽しんでいた。最終的にEALの先生にすばらしかったとほめられて、発表の機会を与えられた子どもには、あまりできなくて、担任の先生が読みも書きも個人指導していた子供も入っていた。

教育ボランティアの方に話を聞いたところ、子どもがいまこの学校の幼稚園クラスに通っている保護者であった。週に3回、小学校の教育ボランティアをやっているとのことであった。一見したところ南アジアのイスラム教的な民族服を着用した方であったが、子どもたちとはかなり仲がよく、とても慕われているようであった（写真2の右真）。

英国及びスコットランドは、多民族国家及び地域であり、とくに都市部は、移民が多い。エジンバラ市のこの地域は、アジア・アフリカ系の人が多く、このクラスでも5、6人がそうであった。近年は、ポーランドからの移民がかなり多いらしい。校長によれば、文化的な多源性こそが地域社会を豊かにする、子供一人ひとりの個性、多様性を尊重する、という信念があるとのことであったが、名目的に唱えているだけではなく、実際に教育ボランティアとして普通にイスラム教等異文化の人を受け入れ、個性や多様性を尊重しつつ、子どもの中に落ちこぼれが出ないよう配慮された授業形態となっていた。

## 2) 小学校3年生の授業（算数）

小学校は、6月に終了するので1年生のクラスだけが観察可能であった。8月の学年開始直後に3年生及び複式学級を観察させていただいた<sup>(4)</sup>。概要は以下の通りであった。

①学級の規模：小学校3年生（Primary 3：7歳児クラス）児童数は25人で、学級担任の先生が1名、学習支援者が1名の2人で授業を構成していた。

②教室の造り：教室自体は、日本の小学校の教室より少し大きめの真四角に近い教室である。3年生クラスでは、1年生と同じくグループ学習用のテーブルセットが、4つあり、そのうち、二つは10人がけ、二つは、6人掛けと4人掛けにセットされていて、10人グループ、9人グループ、6人グループにわけ、大きなグループが大きなセットに座っていた。

③観察時の授業内容：算数のかけ算と割り算で、二桁までであった。詳細は後述する。

④授業方法と進行：1年生と同じくやはり、最初は、教室のある場所に全員を集めて、かなり詰めて地べたに座らせ、リラックスした雰囲気その時間何をすべきかの説明をする。最初にクジラの絵本を使って導入し、掛け算と割り算の話に持っていった。「2に何をかけたら8になる」「8を二つにわったら」とか問いかけを行った。それから、グループ分けを行い、3つのグループを作ってそれぞれが1時間半でやるべきことを指示した。そのうち、一つの6人グループは、学習支援者が別の教室に連れて行き、そこで学習するという指示（こちらは後を追うことができなくて観察できなかった）。3つのグループが約1時間半に渡って、それぞれ異なる課題に取り組む形式で、いわゆる課題別グループ学習ということになる。グループは授業終了後確認したところ、能力別に編成しており、その能力

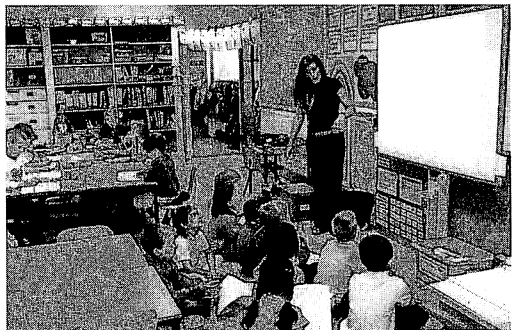


写真4 小3授業風景1（課題別グループ学習）

に応じた異なる課題をグループに与えているとのことであった。

授業の進行を詳細に報告したい。まず、かりに教室に残ったグループをA、Bとすると、Aグループは、市販のワークシートというかドリルのようなものを2ページ、やるように指示し、Bグループは、数の配列のパターン、ということで、パソコン（以下PCと略）のスクリーン兼ホワイトボードを使って、「1、3、5、次は何が来ますか」などと説明し、先生が作ったプリントやるように言われた（写真4を参照）。

先生は、分からないことがあったら手をあげるように伝え、それからが非常に忙しく、基本的にすべての子供を回って、アドバイスをしていた（写真5左の左上）。児童1人ひとり解答を出すスピードがまったく違い、Aグループの早い子は、30分ぐらいですべてを終わらせて、担任の先生のPCに入っている掛け算の算数ゲー

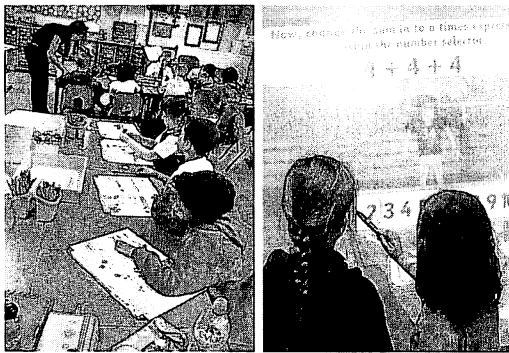


写真5 小3授業風景2（個別指導・ITC）

ムのようなプログラムをスクリーン兼ホワイトボードを使って、やっていた。

担任の机の上にPCが一台あり、それが、ホワイトボード兼スクリーンに接続されていて、特殊なペンをつかえば、そのスクリーンに書き込んだ文字がPCにもインプットされるようになっていた。また、スクリーン上でクリックして、PCを操作することもできるようになっているものであった。多くの教材、問題集・ドリル、学習ゲーム等がぎっしり入っているようであった。すべての教室にこのPC及びスクリーンシステムがあると同時に、この学校には、PC25台ほど入っているPC専用教室まであった。

Aグループの遅い子は、60分ほどかかったが、何度も何度も先生が回ってきては、おはじきのようなものを使って分数の計算をさせていた。ドリルの最後の問題が $30 \div 5 = 6$ というものののだが、「BBQをしようとしています。ソーセージが30本ある、コンロとフライパンは5つあります。ひとつのフライパンで何個ソーセージを焼けばいいのですか」という問題。30個のおはじきを用意して、一個一個フライパンの中に入れていく、という作業によって、割り算を習得するという方法だった。早い子は、おはじき使わないで、答えていたが、遅い子は、一生懸命フライパンに上におはじきを並べていた。

Aグループは、次第に多くの子がPCゲームに移っていったが、Bグループは、かなり時間を費やしていた。が、ここもひとりひとり、とくに分からないという子、遅い子には、先生が何度も何度もアドバイスしていた。

60分ぐらいたち、Aグループ全員が終了したころ、学習支援者が別の教室に連れて行ったCグループが帰ってきた。学習支援者が、6人につききりで教えており、一人ひとりのできたレベルを学習支援者から担任の先生は報告を受け、それを自分のファイルに書き込んでいた。一人ひとりの能力、学習の進展具合を毎回、確実に記録しておくようである。その後さらにCグループは、学習支援者が配った新たなドリルをやり始めた。

興味深い点は、最後の最後まで全員がドリルや、プリントを全部やり終わるまで担任の先生は、アドバイスし、チェックするということがある。全員答えが当たっているか、わかっているかチェックして、OKをだして良い児童には、胸にシールを張ってあげていた。わかりの遅い子は、先生から充実に習うことができ、わかる子は、さっさとすませPCの学習ゲームを行い、そのゲームの仕方や答えを別の子に教えるか、あるいはまた、Cグループが帰ってきたあとは、好きな本を読んでいい時間ということで、教室の本棚から本をとって読んでいた。ほとんど先生から習うということがなかった。つまり、教育は、わからない子、わかりの遅い子ほど、

充実に先生に配慮されて、熱心に長時間手ほどきを受ける、ということである。

観察校では、原則、宿題はないということであった。教科書も教材もプリントもドリルも、すべて家には一切持ち帰らせず、学校で授業中に終わらせる。教科書もプリントも教室で使うものなので、家に持ち帰ることができないので、宿題もやりようがない。わが子の遅い子に対して、宿題を出して、フォローアップを家庭の責任にする、ということもない、ということになる。

最後に、もう一度、全員集合させて学びの確認を行い授業を終了するのが普通だが、少し用事がある、その前に教室を出たので以上が小学校3年次クラスの報告となる。小学校3学年児童は、あと10名ほどいるが、残りの子たちは、2年生（日本の1年生相当）と複式学級を作っているとのことであった。

こちらで、教室の児童数は、極めて重要で、法律で規制されているので30人学級は作れず、また、本来ならば、15人学級ぐらいでふたクラスつくりたいところだが、教員数の割り当てが、かなり単純に学校全体の児童数でくるようで、それで、20人あまりの複式学級を作らざるを得ないようであった。複式学級に対する意識はかなり違う様子が次のクラスの担任の先生のインタビューで判明した。

### 3) 小学校5 / 6年複式学級（英語）

続いて、小学校5年生及び6年生からなる複式学級クラスの授業についてである。授業終了後に担任の先生にインタビューを行ったが、それを織り込みながら報告したい。

①教室の規模と造り：生徒は、5年が9人、6年が13人。教室は、5、6人掛けのグループ学習イス机中セットが4個、4・5人掛け小セットが二つで、やはり個々の生徒が、一斉に先生に向って、机をならべ、児童間のコミュニケーションをさせない、というような日本の授業とかなり違う。教室の大きさは、1年生や3年生の教室よりもさらに少し大きいく

らいであった。

②授業の内容：英語の授業と思われるが、6年生はスペリングのテストを行い、続いて5年及び6年合同でオリンピック（Olympic）の文字を利用した作文、辞書の引き方などを教えていた。

③授業方法と進行：5年生6年生も、最初に、教室のすみの全体集合場所で床にすわり、先生の全体支持を聞く。担任の先生も、深く椅子に腰掛け、ゆったりした雰囲気の説明するが、クラスを学年別にわけ、5年生を学習支援者にまかせ別の部屋に行かせ（こちらも追うことができない）、6年生は、5年生が別教室に移動した後、最初の40分程度、スペリングのテストを行い、その後5年生が戻ってきて、5年と6年が混ざり合っグループを作り、クラス全員全グループで同一課題に取り組む方式であった。

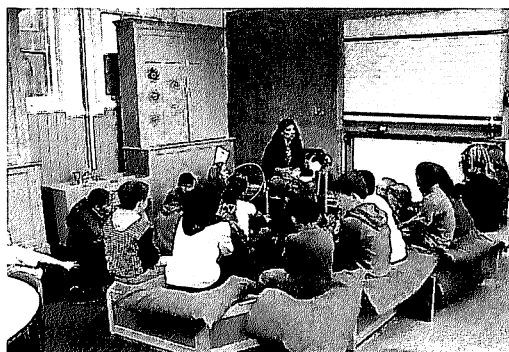


写真6 小5 / 6複式学級の授業風景1

6年生のスペリングのテストは、当然ながら子供間の相互コミュニケーションは禁止である。あとから聞いたのだが、新学年新学期が始まってまだ、4日目なので、子供一人ひとりの能力を確認している段階とのことで、能力別グループ編成をするため準備になっているとのことであった。

その後、5年生が、学習支援者に連れられて戻ってきた。再び、全体集合場所に全員が集まり、次にすべきことが指示された。同一課題にクラス全員が同時に取り組むのは初めてみたが、児童全員に、まったく同じワークシートが配布され同じ作業をするように指示された。座席の



指示はなく自由にグループテーブルに座るように言われ、5年生と6年生が混合してランダムにグループが形成された。

ワークシートには、OLYMPIC という文字が縦に並べられて、それぞれの文字を文書の最初にして、オリンピックに関連し、相互に関連する7つの文書を作りなさい、ということで、「辞書があるので、それを自由に使いなさい」と指示が出され、さっそく学習支援者は、各グループセットに3、4冊の英語辞典をおいてあげていた。

5年生6年生、結果としてまじりあって座っていたが、5年生の4人だけは、学習支援者がつきっきりで小テーブルセットに座って、指導していた。あとのグループは、担任の教師が巡回したり、わからない場合は手をあげて先生に来てもらったりしながら、やはりマンツーマン的な指導をしていた。学習支援者は、おもに辞典の利用の仕方を教えていた（写真7参照）。ここでも原則は、文書作成の遅い子、わからないという子ほど、充実に配慮され、教師が時間をかけて、個人指導する体制であった。

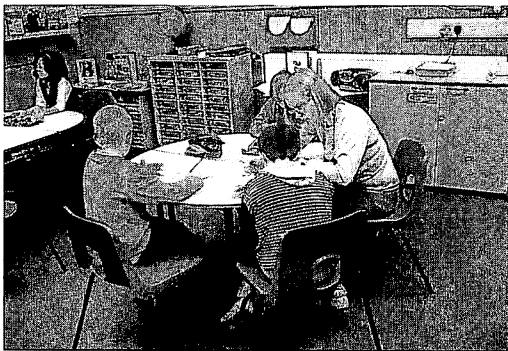


写真7 小5/6授業風景2 (LAによる個人指導)

聞き取りで分かったことだが、新学期の最初で、まだ子供一人ひとりの学習到達度、能力等を把握していないこと、並びに今回のテーマ「OLYMPIC」のスペルで文書を作るという、学年横断して扱える共通テーマを設定したので、能力別グループ編成をしていない、ということであった。

さらに担任の教師は、こういうグループ学習の場合は、分かる子が、分かるの遅い子に、相

互にコミュニケーションをとりながら教えてあげるといふこと、を意図しており、それは、分かる子にとっても、「教える」ことがさらなる理解や習得にとって非常に大きなメリットがあるので、こういう習熟度混合型のグループ学習を採用する意義だといふことを強調していた。

1年、3年生クラスでは、3年生のAグループのPC学習ゲーム以外、教えあう、学び合う状況が実はあまり見られなかった。しかし、小学校5年6年複式クラスでは、明らかに教えあうことを意識してグループが形成され、実際に教えあっていた。

複式学級は、「担当する教師の負担の大きさ、また、保護者等から、十分な教育がされないことと嫌がられることはないのか」という質問に対して、「複式にせよ、単年度クラスにせよ、いずれにせよ、個々の生徒の力を把握して、グループ形成していく、というやり方で、一つの学年のクラスでも、二つの学年のクラスでもまったく同じやり方なので、そんなに問題はない、教師の負担がさほど大きいわけでもない」と主張していた。

この複式学級の担任教師は、偶然であるが、前回（前年度）は、小学校1年次の授業観察の際に受け持っていた先生で、今回は5・6年の複式学級の担任となっていたが、非常に能力が高く、小学校1年でも5/6年でもクラスを完全にコントロールしていたと言える。とくに子供の集中力が切れて、遊び始めても、教室がうるさくなってきても、ある特定のリズムで手をたたく、静まるように指で合図をお互いに送らせるなどで、瞬時に完全に自分の方に児童全員を注目させ、静かにさせることができる技術があった。威厳と権威があるという雰囲気であった。

「大学でこのようなクラスコントロールの技術は習うのか」という質問に対しては、「まったく習わない、個人的に習得する」とのことであり、「児童に説教や威嚇などで教室を支配する必要は全くない」との返答であった。

最後は、みんなまた、全員集合場所にあつま

り、発表したい子、と手を挙げさせて、発表したい子全員に発表させ、ひとりひとりの発表の後、教師はよくできたねと褒め他の児童と一緒に拍手してあげていた。当然、みんなに拍手され、褒められた子はかなりうれしそうにしていた。グループ学習の効用は、極めて意識されているようで、特に、教えあい、学びあい、コミュニケーション能力の向上は、社会的能力として非常に重視している、子供の将来の仕事の上でも欠かせないと、担任の先生は主張していた。

授業の中身について、「ナショナルカリキュラムのガイドライン（学習指導要領）による、学年ごとの学習内容と進展具合の規制は厳しくないのか」と質問したが、「スコットランドではそれはかなり変わるもので、柔軟に対応できるので、それを特に厳格に意識してクラスづくり、授業づくりすることはない」とのことであった。

### 3、学校経営と学力向上について校長への聞き取り

スコットランドの小学校の校長は、かなり忙しい。今回インタビューした校長は、「もはや教育者というよりも、ビジネス・マネージャーだ」と断言していた。また、日本の学校の校長と比べると、裁量はやはりはるかに大きいことが分かった<sup>(5)</sup>。

#### 1) 校長の経営と権限

まず予算は、生徒数およびその他必要な施設費等を含め年間いくらかかるか、事前に市役所教育部との調整があり、確定され、一括して降りてくるという（この小学校では、年間、人件費も含めて百万ポンド、約2億2千万円）。

校長は、自分の学校の教員を誰を選ぶか、学校の教員やスタッフとともに必要なポストを確定し、実際に面接、書類審査等を通して、雇用する。日本では、教員の採用および人事異動は、学校現場（校長）にほとんど権限がなく、教育委員会や教育庁の仕事となっているが、スコットランドでは学校現場に誰を選ぶかの権限がある。また、3年に一度とか、教員の強制的なローテーション移動はまったくない。

長い先生は10年以上、いるらしいが、近年は、一度教員になっても、まったく別の仕事に転職する人が多いらしく、給与の面でいい仕事に移っていくとのことであった。実際に50代の先生がこの学校では皆無で、また、男性教師が1名しかいない。もちろん、転職する文化ということもあるが、校長は「給与がさほど高くないからでは」と言っていた。

さらに面白いことに予算は、人件費を含め全部こみで降りてくるので、その中から校長先生自身が教員および学習支援者等スタッフに給与を与えるとのことであった。

学校では、市から下りてくる予算とは別に独自の資金を集めることもでき、保護者へ多額の寄付金を要請する学校もあるとのことであった。金額は毎年変動するらしく、現在いくりに集めているか金額を正確に聞き取ることはできなかった。

この資金には、使用の制限がなく、これで、教育や支援スタッフの給与を払っても良いとのことであった。教員数、学習支援者数は、生徒数に応じて、法で決まっていて、予算はその分の人件費しか含まれていない、とのことで、それをどうにかやりくりして、可能な限り、多くの教員と多くの支援者を雇う、という努力をすると説明していた。

#### 2) 教員の配置と研修

この学校では、特に国際的な、英語圏以外の文化圏からの生徒の受け入れを積極的に推進しているの、法的には、約250人の全校生徒数（全11クラス）に対し3人しか、学習支援者が雇えない（つまりその分だけしか予算が来ない）のを、どうにか、あと9人、学習支援者を雇っていて、現在12名の学習支援者体制ということである。英語を話すことがうまくいかない児童に特に配慮する必要があるの、ぜひこの数は必要だということであった。

教員は、2009年度でクラス担任教師11名のほかに、学校専従ではなく複数校担当の教師として、美術や音楽など専門の教師3人と、英語圏以外の子供たちへ英語の専門教員（EAL教師）

が3人、この学校には週3回ほど配置されている。

さらには、親が入学を希望する場合、障害児も受け入れ、普通学級で学ぶことができるという。具体的には、たとえば、現在、ポーランドから来た女の子が、耳が聞こえなくて、特別支援を受けるために、週に何回か、特別支援の教師が来るとのことであった。またそれだけでは対応できないので、担任の教師は、特別支援教育のための教員研修を事前に受けてもらったということであった。他に盲目の子がいるとのことであった。

この特別支援のために、市教育部と、その子のためにどんな支援が必要か、担任の教師にはどのような研修が必要か、話し合いながら必要に応じて追加的措置を決めていくということであった。

しかしながら、障害のある子をだれでも受け入れるわけではなく、100年以上前の建築物で階段が多数あり、車椅子の子は受け入れられないなど、障害の種類状況等に応じて、受け入れを決めて、受け入れられない場合は、特別の学校や受け入れ可能性のある他校を紹介するとのことであった。

教職員研修は、非常に多くのプログラムを市役所教育部が用意し、ほとんどの教員は、長期休みの期間中あるいは学期中の放課後、その研修を受けているということであった。最新式のPCハード機器があり、またPC教材ソフト等も膨大な数があり、それを使いこなさなければならぬということもあり、研修を用意することで教員の能力アップに市役所教育部自ら責任を持って対処していると言える。

また、新指導要領の習得のための研修は、かなり充実していて、ほとんどの教員は、新指導要領（08年8月使用開始）について、すでに多くの研修を受けているとの説明であった。

校長は、教員と相談し、市教育部と相談しながら、その教員に必要な研修（たとえば聴覚障害の特別支援、PC操作、新ソフトの使用、新学習指導要領等）を受けるように、教員に指示するとのことであった。

学習支援者に対しても研修制度があり、その研修についても校長は必要に応じて指示する。学習支援者は、専門の1年以上のコースを受講終了した、有資格者だけがなれる。ほとんどは、教員を目指すということではなく、学習支援者として仕事をしていくそうである。この小学校では唯一、2008年度から2009年度にかけては一人だけ、教員を目指して大学に進学したとのことであった。市が提供する研修をいくら受けても、学習支援者としての経験年数をいくら重ねても、それだけでは、教員になることはできず、教員養成系の大学を卒業する必要があるとのことであった。

### 3) 全国学力テストと学力向上の取り組み

分権改革後、英国連合王国全体での学力テストからスコットランドは離脱したが、スコットランド独自の学力テストを創設しており、スコットランド全国学力テストが全小学生に課され、その成績を一人ひとり出しているとのことであった。

日本の全国学力テストと抜本的に異なるのは、その利用方法についてである。一人ひとりの児童について、その学力テストの評価とそのテスト評価のみならず、健康状態、家庭環境、精神面など、10項目ぐらいの評価項目がある、評価表のようなものがあって、市役所の教育部の職員がそれを毎月チェックしに来るとのことであった。

250人の児童一人ひとりの児童の多項目評価表で、問題ありの評価になっているところは、その理由は何なのか、校長に問いかけ、今後、その児童のその項目に対して、どのような措置を考えているのか、市教育部が支援してほしいことは何か、など、問いかけて、ひとり1人の児童の対策を作らせる。対策には、たとえば、家庭問題などへの対処には、ソーシャルワーカーとの連携、という外部の機関との連携もあり、実際に聞き取り調査の朝にはソーシャルワーカーとミーティングしてきたとのことであった。

次の月に、実際にどのような対策がなされたのか、どのような改善されたのか、対策の効果

はあったのか、証拠（エビデンス）によって、校長は市教育部の担当職員に説明できないとならない。

児童のプライバシーに関わる非公開情報であるが、例示としてPC上の画面に写してもらい説明を受けたが、一人の外国から来たばかりの児童に週に8時間、英語の先生がつきっきりで授業をした、という対策（証拠）が書き込まれていた。

したがって、校長は、全校の全児童の学習状況・学習環境をすべて説明できるようにしておくかなければならず、実際に把握しているとのことであった。そのために校長は、クラス担任教師及び専門教師に一人ひとりの児童の学習状況を逐次報告してもらい、密接に連携しているとのことであった。

クラス担任は、評価の悪い子供の、評価の悪い項目に関して、とにかく改善するように努力義務が生じることになる。とにかくわかりの遅い子、到達度の低い子に対して入念に配慮する授業が生まれることになるのかについて、単に教員個人の努力義務や倫理観あるいは能力という問題ではなく、システムとして取り組まざるを得ないよう制度化されていることが分かった。

市の教育審査担当職員は、一人ひとりの子供の就学状況を多項目評価表によって、校長に説明責任を求めるので、学力テストのみの評価ではなく、学校の平均点、学校の順位などは、毎月のチェックでは評価の対象外である。仮にそれで評価するとすると、外国から来た子供、障害児を受け入れている場合は、明らかに不利で、どこも受け入れなくなる。校長は、一人ひとりについて聞かれるので、たとえば「この子の学力テストこんな低いのはなぜか」というような質問に対して、「この子どもは、外国から来たばかり、現在、特別英語教師が付いている、今後さらに個人指導の時間を増やしてあげる予定」と、理由と改善の対策を答えればいいわけで、説明できれば、学力テストの成績そのものは問題にならないわけである。

しかしながら、あまりにもスコットランド全国テストで評価が悪く、改善の状況が見られな

い、改善できない理由を説明ができない（こちらこそ非常に重要）学校は、実際につぶされる、こともあるという。

いずれにせよ、スコットランドでは、学習指導要領は、法律ではなく、順守義務はないというものの、このようなテストがある場合は、指導要領によるよりも、厳しい、学習水準、到達目標の設定があると思われる。しかも一人ひとり児童の学習到達度の向上、特に底上げが極めて重要となる。

#### 4、分権に伴う教育改革

校長のインタビューを元に、分権改革がもたらした教育の内容及び質的な転換を要約していきたい。

##### 1) 改革後の教育の転換

新指導要領についてだが、校長の説明によると、「自分で考える力」「自分で答えを探し出す力」を非常に重視していて、教師の指導の重要な点として、『『答え』を教えない』『自分で考えさせる』『仲間同士のコミュニケーションで答えを見つけさせる』』ということを教師の役割と考えているという。

以前は、教員と言えば、答えを持っていて、それを教えてあげること、質問があれば、すぐに答えることが役割だったが、2000年より、画期的に変わった。2000年以降、何があったかという、スコットランド政府の設立と、「教育」の分野の権限のスコットラン政府への移譲である。

スコットランドでは、1999年、分権により教育権限を移譲された議会及び政府が構築された。保守党政権下に国主導で進められた新自由主義的な教育改革の見直しが始まる。教育目標及び方法、学習指導要領の大転換が着手された。スコットランド政府が、2000年よりスコットランド全国民的な議論の場を提供し、のべ2万人が参加した大々的な議論が起こり、校長によるとその議論から導き出され転換された教育目標・教育方法が以下の通りである。

◆教育の目標：「自分たちで考え、答えを探

しだす力を最大化すること」

- ◆教師の教育方法：「すぐに「正答」を教えない、正答を得ることが重要ではない。もしかしたら、間違ふかもしれない、時間がかかるかもしれないが、児童が自分たちで多様な思考とコミュニケーションから答えを見つけ出すことを援助をしていく、それが教育の方法であり先生の役割である」

校長によると、スコットランド政府は、スコットランドの教育は何か、どうあるべきか、スコットランド国民全体を巻き込んだ議論を大々的に展開して、スコットランド教育の原理原則、基本的な理念を作り上げていき、その中で、「自分で答えを探しだす力」がクローズアップされ、スコットランド独自の指導要領の創設に繋がったということである。また、教育現場では「すぐには答えを教えない、考えさせる授業」の徹底が推し進められたとのことであった。この部分は、イングランドとは違うと校長は説明していた。

## 2) 国民的議論から導き出された新学習指導要領

すべての児童生徒の学習の到達目標として以下の4つの目標が設定された。

- ① 学習者として成功できる人
- ② 自信に満ちた個人
- ③ 効果的な貢献者
- ④ 責任を負うことのできる市民

英国全国学カテストからの離脱及びスコットランド全国学カテストの導入は、イングランドの学習指導要領とは異なって明確化された、個々の児童生徒の1-4の視点での到達保障を行うためのものということになる。

校長は、「このような学力観にもとづく教育目標は、スコットランド国民的議論から明らかになったスコットランド社会の要請であり、今後のスコットランド社会の子供たちに必要とされている力である。」と述べ、また次のような話があった。

「『自分たちで答えを探していく力』は、この1から4の学習目標にとって、もっとも重要

で児童が学校のお客さんではなく、つまり誰かが学習をセットしてくれて答えを教えてくれることに従うのではなく、自分たちが学習の主体、学校の主体として能動的な学習の主体者になること、自分たちで学校を作っていくんだ、自分たちで社会を作っていくんだ、という意識と実践力をはぐくむことなのだ」ということであった。

それは、教員の側が式典のいっさいをお膳立てをして卒業生をお客さんとして、壇上に一人ひとり呼び出して卒業証を手渡す日本の卒業式との違いを見れば「学校をつくる主体」という意味がいっそうはっきり分かる。この小学校では卒業式のいっさいをお膳立てするのは卒業生であり、卒業生全員の主体的な話し合いで式の中身を決めていき、卒業生が壇上に居続けて、卒業生の側が教員の一人ひとりを壇上に呼び出して感謝状を贈る形となっていた（写真8）。



写真8 卒業式＝小7の学習成果発表会

自分たち自身で自分たち自身の学校生活と成長を振り返り、未来を想像するお芝居。脚本、演出、大道具小道具作成、すべて自分たちで。

「グループ学習も、2000年以降なのか」、という質問に対しては、「戦後間もなくから」という答えであった。それまでは、グループ学習ではなく、一斉授業が基本で一人の教員に対して生徒全員が机を向け、権威主義的なクラスの雰囲気であったという。現在の日本ではまだそういうクラスであると述べると、校長は、「学校は社会の雰囲気や要請をそのまま再現しており、学校は社会の縮図なので、日本社会自体がそうなのでは」と答えていた。

解釈すれば、スコットランドも、義務教育が確立して、少なくとも終戦後までの長い間、権威をもった先生が、生徒がばらばらに分断され相互にコミュニケーションできない教室で一方的知識を教え込んでいくと授業が普通で、戦後、社会の流動性とともコミュニケーション力の獲得が職業と生活に欠かせなくなったがゆえに変わってきたというように理解できる。

## 結びに変えて

### －学校は社会の鑑－

スコットランドの小学校は、極めて規模が小さく、ひと学年、2クラス以下が大半である。かなり簡単に複式学級を作る。エジンバラ市（人口約50万）の中心に近く、100年以上の歴史を誇る観察対象の学校も、3つの複式学級があった。那覇市あるいは沖縄本島中南部の小学校というよりも、雰囲気としては、都心部の学校でさえも、沖縄の離島へき地の学校に似ている。

それがゆえに、このような都心部の小学校でさえ、子供たち間の相互関係も、地元地域と学校のつながりも、日本の都市部の学校よりも、沖縄の小さな離島の学校のような雰囲気と言って過言ではない。とにかく児童の間、教師と児童の関係、教師と保護書との関係が密であり、かなりの信頼関係が構築されている様子がうかがえた。

小学校の全クラスが、日本で言えば複式学級の的な、すべての授業をテーマ別にグループ編成して、グループごとに違う課題を同時並行的に取り組む。その場合も、個人個人の子供の着実な学習の進展に結びついていることに気をつけなければならない。しかも、宿題はないので、学校の中で学習が完結するように授業構成しなければならない。学力低下の責任を家庭のしつけや家庭学習に押しつけることはなく、家庭の問題を含めて、学校の仕組みそのものの中に一人ひとりの子どもの「学び」の充実に対する配慮が制度化されていた。

沖縄では、また全国学力テスト、ダントツの最下位というニュースが見られたが、その犯人

探すと、その対策についての言説は、疑問が非常に多い。家庭のしつけの問題、家庭での学習の習慣の問題、教師の努力の問題等々、個人的な努力の問題と犯人探しに終始していて、クラスの構成や構造の問題、学力向上の底上げを図る教育方法と評価システムの問題など、教育の理念、目的、方法と教育システムの構造的な問題が浮かび上がってこない。

校長は、「学校はその社会のしくみそのものであり、社会の要請を反映している」と強調していた。つまり、我々は、今どういう社会で今後どういう社会を目指していくのか、そのためにどういう教育が必要なのかという議論を受けて学校のあり方が決まるということである。スコットランドではスコットランド政府の設立後、大々的にこの議論が巻き起こされ、国民的合意が形成されていったということである。

こういう問題を議論さえないことや、自分たちの専門・権限と主張する人物たちに任せておくこと、あるいは個別の学校の問題、それぞれの教師の努力の問題、家庭の問題、個人の問題としておくことが我々の社会ではないだろうか。そのような社会そういう社会であれば、そういう社会の学校にしかない、ということである。

この校長の言葉から筆者なりに考察すると次のようなことがいえる。日本・沖縄においても社会の状況が変化して、別の社会の仕組みが要請されているあるいはすでに構築されているのに、学校が、教室が、昔のままの社会の制度の仕組みになっていて、その齟齬が非常に大きくなっており、学校教育の現代社会へのレリバンシーが著しく低下している。そこから生じている問題が日本・沖縄の教育の最大の問題あるいは根源的な問題ということになるのではないだろうか。

## 脚注

- 1) 島袋純「スコットランドの分権改革－エジンバラからの報告－」北海道町村会編『分権時代の自治体理論』北海道町村会、1999年5月、172頁～204頁を参照せよ。

- 2) David Raffae, "Devolution and Divergence in Education", John Adams and Katie Schmueker ed. *Devolution in Practice 2006*, Ippr North, Newcastle Upon Tyne, 2005, pp.52-69. を参照。
- 3) 小学校1年次クラスの授業観察は、2008年6月18日午前エジンバラ市立ドライ小学校にて行われた。すべての写真は校長及び担任の許可を頂き筆者が撮影したものである。
- 4) 小学校3年次クラス及び5/6年複式クラスの観察は、2008年8月27日午前エジンバラ市立小学校授業観察及び担任へのインタビューをまとめたものである。

- 5) ドライ小学校校長へのインタビュー(2008年8月27日午後)に基づく。

#### 謝辞

この報告の作成にあたって、エジンバラ市立ドライ小学校校長のデビッド・ハミルトン・フレミング (David Hamilton Fleming) 氏及び同校の諸先生方には、多大な協力を頂いたことに深く感謝申し上げたい。なお、同校の事例研究における授業観察及びインタビュー調査記録は、筆者の観察メモ及びインタビューメモに基づくものであり、内容についての責任はすべて筆者が負うものである。